

《岐阜新聞・岐阜放送賞》

なりたい自分になるために

各務原市立緑陽中学校 3年

羽沢 健瑠

「右手がない人でもバスケットボールはできる」あなたはそう思いますか。

僕は「できる」と信じて、小学一年生の夏にバスケットボールを始めました。最初はもちろん、できないことが山ほどありましたが、チームメイトが側で支えてくれたり、父が毎朝一緒に練習してくれたおかげで、シュートやドリブルテクニックなど、今までできなかったことが徐々にできるようになっていき、次第にボールを自由に扱えるまで成長することができました。当時の僕は、自分が成長していくことが嬉しく、バスケットボールが楽しくて仕方がなかったことを今でも覚えています。

しかし、学年が上がるにつれ、チームメイトの実力は徐々に上がっていき、自分とチームメイトの間に大きな実力の差を感じるようになりました。同学年や後輩のチームメイトが自分よりも評価され、活躍している姿をただ見ていることしかできない自分に対して、心の底から嫌悪感を感じていました。バスケットボールをするたびに、自分が積み上げてきた自信が崩れ落ちていく日々、「右手がなくてもバスケットボールはできる」そう思っていたはずなのに、それは次第に「自分は周りの人とは違う」「自分にはバスケットボールは向いていない」という考えになったのです。いつしか僕にとってバスケットボールは辛いものになっていました。

それでも僕は、バスケットボールを続けました。自分がなりたい自分になることを諦めなくなかったのです。周りとの実力の差があっても、心の底では「自分なら右手がなくても何でもできる」そう信じ続けていたからです。自分の可能性をゼロにするのは、絶対に嫌だったのです。「できる」「できない」そんなことは考えず、僕は努力をし続けました。練習は自分のできる全力で取り組んだ。コーチに怒鳴られても、それを成長できるチャンスだと考え、受け止めた。自分の課題を見つけるために、試合のビデオを見て父と一緒に研究をした。そうやって努力し続けた結果、僕は再び成長し、今ではバスケットボール部のキャプテンを務めるまで実力をつけることができました。

もちろん、まだまだ実力が足りていない部分が多いですが、小学生の頃になりたい自分になることを諦めず、努力し続けたことが、今の僕の大きな自信になっています。バスケットボールと出会い、本当の意味で自分のことが好きになれた。受け入れられた。自分は自分でいいのだと思うことができました。

そんな自分になれたのは、時には立ち止まっても、自分の可能性を信じて前を向いて進み続けることができたから。前を向いて進み続けることができたのは、家族やコーチ、チームメイトが側で支えてくれたからです。バスケットボールを通して、右手がないことは僕に欠けていることではなく、僕自身のかけがえのない「個性」であると思うことができました。

人には、それぞれなりたい自分と、それを実現させるための無限の可能性がある。僕はそう考えています。とはいえここで「諦めなければ必ずなりたい自分になることができる」そう主張するのは無責任でしかないと思います。僕自身も、これまでの人生の中で努力してもできないことはたくさんあったからです。しかし、たとえそうだったとしても、なりたい自分になることを諦めないでほしい。挑戦し続けても、なりたい自分になることができないこともあるかもしれない。でも、なりたい自分になることを諦めない限り、可能性がゼロになることはありません。僕と同じように、目標に向かう道のりの中で、辛いことや苦しいこと、もうやめたいと思うこともあると思います。しかし、あなたがなりたい自分になるために必死に努力し続けてさえいれば、その姿を見てあなたを支えてくれる人は必ず現れます。自分の可能性を信じて、前を向いて進み続ける。それが、なりたい自分になるための大きな一歩になると、僕は信じています。

最後にもう一度、あなたに問います。「右手がない人でもバスケットボールはできる」あなたはそう思いますか。